

日本語動詞「ある」と英語動詞< DO >の対照的研究

金谷武洋
モントリオール大学

Résumé:

Dans la première partie, nous proposerons l'explication systématique et globale des quatre formes grammaticales importantes du japonais: passif, causatif, intransitif et transitif. En effet, ces quatre formes peuvent être expliquées systématiquement, plutôt que séparément, en les positionnant côte à côte sur une ligne droite. On verra que cette ligne est constituée par un processus de <double-recyclage> des verbes <aru> et <suru>.

Dans un deuxième temps, nous comparerons les deux verbes: <aru> japonais et <do> anglais, lesquels jouent un rôle de première importance dans chacune des langues en question. Leur différence semble bien explicable sur le plan typologique, consolidant ainsi notre position présentée dans Kanaya (1997, 1998b)

1. はじめに

日本語教室で文法を教える際、自動詞、他動詞、受身、使役らはいずれも重要な文法項目だが、これらを「連続線上の4点」として捉え説明することを本論文の第一部で提案する。その過程で、助動詞や形態素と姿を変えて再使用（リサイクル）された二つの動詞「する」と「ある」が、この連続線を形態論的に支えていることを指摘する。続く第二部ではこの内で特に「ある」に注目し、日本語におけるその群を抜いた重要さを、やはり同じ様に英語において突出した働きぶりを示す動詞DOとの比較の上で対照的に分析する。

第一部：連続線上に乗る自動詞、他動詞、受身、使役

2. 英語と日本語の「受け身」の違い

先ず始めに例文(1)(2)から「受け身文」を考えてみよう。(1)-jと(1)-eは能動文であり、受身文である(2)-jと(2)-eにそれぞれ対応していると思われる。本論文の例文中、数字に続くアルファベットのjは日本語文、eは英文、fは仏文、gは独文であることを示す。

(1)-j 「熊が太郎を殺した」
(1)-e “A bear killed Taro”

(2)-j 「太郎が熊に殺された」
(2)-e “Taro was killed by a bear”

この例からだけは、日本文と英文の受身文の根本的な違いはなかなか

見えてこない。その為にうっかりすると結論として次の様な3点を挙げ
てしまいがちである。

- ・ 基本的なのは能動文であり、その構文的変形規則によって受身文が作られる。
- ・ 両者の意味は基本的に同じ。（主語が行為者か被行為者かの）視点の違いだけである。
- ・ この二点は日英語とも共通している。

しかし、それは正しくない。何より(2)の二つの受身文のニュアンスがかなり違う。それは、日本語における受身がそれを取り巻く、より広範な表現の一部であるのに、英語の方は受身の意味に限られることが大きく原因している。

こう言うと、日本語の受身の形である-(R)ARERUには、その他にさらに「尊敬（先生がその事を話された）・可能（その野菜は生のまま食べられる）・自発（亡くなった父のことが思い出される）」の3つの用法があることが思い出される。勿論、そこには共通の意味があつて、それが「ある行為が人間のコントロールを越えたところでなされる」であることは既に指摘されてきた。（注1）

つまり、上の(2)-j「太郎が熊に殺された」は単に(1)-j「熊が太郎を殺した」の視点を変えたものではなく、熊が太郎を殺した事実の他に「その状況下で太郎は無力だった」という意味が加わっているのである。一方、英文の受身文は、能動文と同じ事実を単に視点を変えて言ったという性格が強い。

そもそも英語の受身文は意味範囲がとても狭い。同じ印欧語のフランス語でさえ、受身構文である「BE動詞(=être)+過去分詞」は決して受身の独占ではない。使われる動詞によっては他に「完了」の意味もある。例えば「彼は死んだ」はこの構文が使われて<Il est mort>となるが、これを一語一語変えて得られる英文<*He is died>は明らかに非文法文である。現在完了形を使って<He has died>、あるいは形容詞文にして<He is dead>と言わなくてははいけない。

数量を伴う文など、既に指摘されている多少の例外を除けば（注2）、英語においては受身文は能動文の単なる裏返しであることが多い。つまり、受身文には大抵それに対応する能動文（例えば上の(2)-eに対する(1)-e）がある。また、能動文の目的語が受身文では主語となるのだから（ここでは“Taro”）元の能動文は他動詞文でなくてはならない。これに対して、日本語では「ある状況における制御不可能」こそ受身・可能・尊敬・自発に共通の意味なのだから、能動文が他動詞文である制約は不要である。自動詞能動文とそれに対応する受身文の例を挙げよう。

(3)-j 「朝早く次郎が来た」

(3)-e “Jiro came early in the morning”

(4)-j 「朝早く次郎に來られた」

ここで注目すべきなのは(4)-jにおける話者の気持ちである。つまり「次郎に朝早く来られて困った」という被害者の立場に自分をおいた表現であり、この点、単に事実を言っている(3)-jよりも情報量が多く、文として「意味的に豊か」である。また、時にはこの制御不可能な状況を逆に楽しむといった場合もある。「ちょっと風に吹かれてこよう」などはそんな例で、この場合は「迷惑」とは言いにくいが、日本人の心理には、長いものに巻かれて「参った、参った」と言いながら、実はその状況を余裕をもって味わう趣向もあるのだ。

いずれにしても、これらの例から「日本語の受身文は能動文と視点は変わるが意味は同じ」とはとても言えないのは明らかだろう。日英語の受身に関する違いをどう日本語教室に反映させたいのだろうか。

よく学生が作る文に「ジャンが私の足を踏みました」というタイプの文がある。これは文法的には正しいものの、事実を述べているだけなので「それがどうしたの」と言いたくなる。ところが「受身文にしてください」と言うと、今度は「私の足がジャンに踏まれました」と変えるのである。これは英語の受身文の「変形規則」を日本語に当てはめた結果であるが、文としてはさらに悪くなっている。ではどう直したらいいのだろうか。

この文は「(私は)足をジャンに踏まれました」とするとずっと自然になる。つまり、日本語では踏まれて困るのは「足」ではなく「私」であるからで、「足」と「私」を切り離れた方がいい。さらに言えば「私」はわかりきった言葉なので無い方がいい。こんな例を挙げると、日本語の受身文は英語のそれとはかなり性格を異にしていることを学生に理解させやすい。この際に正しい文を作らせるポイントは「誰が困っていますか」という質問である。

3. 「受け身文」と「やりもらい文」の関連付け

さらに、折角学生に「話者が困っている状況」の話をするのだから、受身の発展として「話者が喜んでいる状況」に繋げることも効果的だ。「ジャンが足を踏んだ」事実は変わらないが、今度は「その状況で私は喜んでいる」ことをどう言えばいいのか。例えば疲れた足を按摩代わりにジャンがわざわざ踏んでいる様な状態である。そこは対人関係に特に重きをおく日本文化であるから、こういったニュアンスも表現出来るノウハウを備えているのである。

この場合は「ジャンに足を踏んでもらった」（あるいは視点を変えて「ジャンが足を踏んでくれた」と「やりもらい文」を使えばいい。この、日本人ならすんなり口をついて出てくる表現が英語や仏語話者の学生にはなかなか自然に出て来ず、意識的に学習しなければいけない点は、上の「迷惑の受身」によく似ている。「話者の気持ち」というモータル表現として「受身」と「やりもらい」を関連づけて教えると学習効果上がる。

受身文に話を戻そう。以前「受け身文」に関して発表をした時（注

3)、英語にも「話者の無力さ」を表現する構文があるのでは、という67コメントを戴いた。その方は次の(5)-eの様な文を挙げられた。

(5)-e "I got my purse stolen"

(5)-j 「財布を盗まれた」

なるほど(5)-eは一見(5)-jのニュアンスをそのまま持っているという印象を受ける。しかし、この二文には「その基本的な発想において」根本的な差がやはりあると思われるのだ。

その理由はここで助動詞的に使われている<get>の基本的な性格である。日本語の受身の助動詞は実は動詞の語幹に-(R)ARU、つまり動詞の「ある」が後置されたものである。この「る・らる」が現代日本語では「らる・られる」に変わった。この「ある」は文字通り『人間のコントロールを越えて、そこに自然現象として「ある」』ことから来ていることは言うまでもない。(注4)一方、英語の<get>のはそういった自動詞的な意味はなく、むしろ他動詞の最たるもの「得る・手に入れる」である。その証拠に、この同じ<get>が、全く同じ構文で、受身とは正反対の「使役」でも使われるのである。またこの状況はやはり他動詞の<have>にも「使役」と並んで「受身」があることも理解を助ける。日本語の「ある」からは使役形が作れないことは言うまでもない。

(6)-j 「お食事を持って来させましょう」

(6)-e "I will get your dinner sent in"(使役)

(7)-e "I had my hair cut"(使役)

(8)-e "I had my hat blown off"(受身)

これで明らかな様に、英語の<get>を使った受身文は実は使役が発想の基礎になっている。

使役を使って受身的な表現に代行させる方法は実は日本語にもあって「親に死なれた」の意味で「親を死なせた」と言うことがある。この場合の「死なせる」は当然文字通りに「殺す」ことではない。「親が死ぬことにおいて何も出来なかった」というのが受身であるが、それから発して「だから私が殺したのも同然だ」という解釈に至ると使役に転ずる訳である。助けられない状態の「見殺し」という言葉も思い出される。いづれ「親が死んだ」という事実には変わりはなく、ここでの問題はその事実に対する話者による解釈の違いである。

再度ここで(5)-j「財布を盗まれた」と(5)-e"I got my purse stolen"の解釈を比べるなら、前者においては「私は無力だった」と言いたいものに対して、後者はそれと正反対の「私に責任がある」という発想がその基本に横たわっているのである。

なお、ケベックのフランス語にはこの「話者の無力さ」を表現する「迷惑の受け身」構文があるのは注目に値する。再帰代名詞を伴っての代名

動詞 <se faire> 構文がそれだ。なお、faireは英語のdoのあたる基本的な他動詞である。

(9)-f “Jean s’est fait voler de l’argent”

(9)-j 「ジャンがお金を盗まれた」

興味深いのは同じ構文が旧大陸のフランスの方では大抵の場合「使役」の意味の時に使われるという事実である。フランスでは文字通り「(自分のために)・・・させる」のである。

(10)-f “Marie s’est fait faire un costume”

(10)-j 「マリーが(自分の)ドレスを作らせた」

この大西洋を越えた同一構文の機能変化は興味深いが、旧大陸の使役表現が本来のものであることは動詞faireそのものの意味「する」からも明らかである。

4. 「受け身」と「使役」を両端とする連続線

受身の話から使役が出てきたので、次に「受身と使役は連続線の両端である」ことを見ていこう。これが日本文法を効果的に教える際の一つのポイントと思われるのは、学生にとってやっかいな「自動詞・他動詞」の区別もその連続線に乗るという大きなメリットがあるからである。つまり、受身・使役・自動詞・他動詞という極めて重要な四文法項目が「総合的なシステムとして」学生に説明出来る利点を強調したい。

本論文の執筆者がこの「連続線」に気付いたのは、英語や仏語の使役／受身表現が「動詞がリサイクル(再利用)された助動詞」を使っている状況を見て、「日本語ではどうだろう」と考えてみたのがきっかけである。言うまでもなく英語では本動詞である<be,get,have,make,let>、仏語でも同様に本動詞の<être,faire,laisser>などを助動詞として使役／受身表現に再利用しているのだが、これはドイツ語やスペイン語、イタリア語など他の印欧語でも全く同様である。日本語の状況を次の比較チャートで見てみよう。(便宜上、日本語は辞書形、英仏語では不定形を使う)

	受け身	普通形	使役
日本語	食べられる	食べる	食べさせる
英語	be eaten	eat	make eat
仏語	être mangé	manger	faire manger

この表から

(a) 英仏語における本動詞(*be, make/être, faire*)の助動詞へのリサイクル (再利用)

(b) 「受け身」と「使役」が共に「普通形」からの派生形であること

の2点は明らかである。(b)は「受け身」と「使役」が「普通形」よりも複雑な形態をしており、有標的(*marked*)である、と言ってもよい。

(b)が日本語について言えるの是一目瞭然だが、(a)についても、前述のように受け身の「らる・られる」は-(R)ARERUという一つの形態素に収斂出来、その古形は-(R)ARUだから、これは「有る・生る」などとも書かれる存在の動詞「ある」から来ていることは、形態論的にも意味論的にも明らかだ。

同様に使役の「せる・させる」も古形は-(S)ASUとなり、後半の活用も本動詞の「す」とほぼ並行的だから、こちらもまた本動詞「す」の再利用である。「す」は現代日本語なら「する」だ。つまり(a)についても、日本語でもその事情は英仏語と同じなのである。ただし、再利用の様子が英仏語と較べて確かに若干「見えにくく」なっている。それは、分かち書きの為に原形を留める英仏語とは違い、膠着語である日本語では動詞が語幹に溶け込んで一体となっているからである。

さらに面白いのは助動詞としてリサイクル (再利用)される為選ばれた動詞が、日本語と英仏両語でそっくりだ、とう点だ。

受け身から言えば、仏語の助動詞*être*はそのまま存在を示す動詞「ある」である。(11)-fの*est*は*être*の3人称単数形。また英語の*be*も全く同様に存在の動詞となりうることは言うまでもない。

(11)-f “*Son livre EST ici*”

(11)-e “*His book IS here*”

(11)-j 「彼の本はここにある」

使役についても同じことが言える。仏語における使役の助動詞*faire*は本動詞では「する」である。

(12)-f “*Marie FAIT ses devoirs*”

(12)-j 「マリーは宿題をしている」

さて、では英語では何故「する」の意味を持つ動詞DOが使われず別の他動詞MAKEやHAVEやGETが使われるのであろうか。それは助動詞としてのDOに「他の機能が多すぎて手が回らない」事情があるからである。その様子は、本論文後半の第二部において、日本語の「ある」と対照的に観察することしよう。

ここでは続いて「自動詞・他動詞」に話を進めよう。本論文で提唱する連続線は「受け身」と「使役」をそれぞれ両端として、その間に、受け身に近く「自動詞文」を、使役に近く「他動詞文」を配するものなの

70 だ。その根拠は、受け身と使役でリサイクルされていた動詞「ある」と「す(る)」がやはり「自動詞・他動詞」の多くに使われているからである。

自動詞には「分かる・始まる・止まる・すわる」など、-ARUで終わっているものが多い。これは明らかに動詞の古い語幹に別の動詞「ある」が付いたものである。例えば最初の「分かる」を例にとれば、古語の「わく(分く)」は「分ける」意味であり、これに「ある」が付いて「(人間のコントロールを超えて自然に)分けられる(様になる)」というのが今日の「理解出来る」という意味の「分かる」となったものである。(注5)

「ドイツ語が分からない」というのは、取りもなおさず「自分にとって意味のある部分に分かれることなく、一固まりの無意味な音の流れとして聞こえる」ということである。この意味を把握してこそ「分かる」が<understand>とはまるで語彙としての発想が違うことが理解出来るので、<understand>が他動詞で直接目的語を取るのに対して「分かる」は理解の対象となるものを直接目的補語(Nを)でなく主格補語(Nが)で表わす自動詞なのはその明確なる構文的証拠である。自動詞「分かる」と「この子供は聞き分けがいい」の他動詞「分ける」は意味的に繋がっている。(注6)

また、こうしてみると自動詞文の「ドイツ語が分かる」と受身文の「太郎が殺される(古語では「殺さる」)」は、意味的にも形態論的にも底で繋がっていることが明らかとなる。「分かる」も「殺さる」も共に「動詞の語幹+ある」であるし、意味も「人間のコントロールを越えた出来事」なのであるから。ただ、起源的には同じでも、自動詞には受身のニュアンスが次第に薄れてしまったという状況がある。

一方、形の上で使役と他動詞も良く似ている。ここでは動詞「する」(古形は「す」)を語幹に組み入れて再利用(リサイクル)した様子が見てとれる。「起こす・倒す・沸かす・殺す」などの他動詞は明らかに「語幹+す」である。というよりは「す」で終わる動詞は他動詞と教えた方が早いであろう。(ただしその逆は真ではなく、全ての他動詞は「す」で終わらない。「開ける・切る・割る」など)

ではこれらをまとめていよいよ連続線にしてみよう。多くの自動詞、他動詞が次の様な連続線上にあると言える。

(R)ARERU	⇔	(R)ARU	⇔	SU	⇔	(S)ASERU
受身		自動詞		他動詞		使役

もっとも、古形をいうならこの連続線は「(R)ARU⇔SU⇔(S)ASU」に収束してしまう。また奈良時代には(R)ARUに先行して(R)AYUという形があった。ただしこの形は「自発・可能・受け身」だけで「尊敬」の意味はなかったが。現在でも使われる「いわゆる」「あらゆる」の2語はこの形態素が化石的に残ったものだ。

さらに付け加えると、上の連続線の自動詞と他動詞の間には、再利用された「ある」も「す(る)」も持たない、いわゆるゼロマーク(無標)の動詞群がある。これらの動詞群を観察して極めて面白いのは、このグループに限っては形の上から自動詞なのか他動詞なのか決定出来ないことだ。語幹に-Uがつくものでも「開(あ)く」なら自動詞だが「割る」なら他動詞である。語幹に-ERUがつくものでは「割れる」なら自動詞だが「開ける」なら他動詞である。この「形からは自他が同定出来ない」事情は「再利用された動詞による自他のマークを持たないためのあいまいさ」と上手く説明出来、学生が納得しやすい。それらの動詞群を考慮するならば、連続線は以下の様に修正される。

(R)ARERU	⇒	(R)ARU	⇒	∅	⇒	SU	⇒	(S)ASERU
受身		自動詞		自/他動詞		他動詞		使役

この様に、連続線には全部で5つの要素が並ぶ。ゼロマーク(無標)の動詞を真ん中に左側には「人間のコントロールの効かない自然の勢いと状態」を動詞「ある」の再利用形で示した自動詞と受身(プラス自発・尊敬・可能)がある。右側という、こちらは「人間的人為的意図的な行為」を表わす他動詞と使役が動詞「する」を再利用した形態素で示していることになる。

日本語の膠着語としての性格上、再利用の「ある」「する」は元の形ではもはや現われないことは前述したが、「ご飯つぶの様に語に語がどんどんくっついて行く」とある学生は心にくい表現をした。「膠着」とはまさに「膠(にかわ)で着くこと」なのだから、この様子はまさしく糊にも使うことがある御飯つぶに譬えられるものである。

第二部：「ある」とDOの対照的考察

6. 「ある」言語としての日本語

第一部で見たように、日本語の動詞「ある」はリサイクルされて多くの自動詞のみならず、受け身と並行して可能・尊敬・自発の助動詞をも作っている。第二部では、この和語の語彙的広がりを探訪し、この動詞が日本語にとって如何に重要な役割を担っているかを指摘する。それと対照的に英語のDOを対峙させ、池上(1977)の主張する「なる言語」日本語対「する言語」英語のタイロロジー(言語論類型論)的対峙を語彙レベルで検証してみるのが狙いである。

宮島達夫(1971)によれば753年から1331年までに書かれた14の日本古典文学作品には延べ総数で約40万語が使われ、どんなに高い頻度で使われても一語として数えた「異なり数」では23,880語あったという。さてこの23,880語から最も使用頻度の高い上位10語は次の様である。(カッコ内は使用回数)

ある(9034)・こと(7654)・ひと(7364)・す(6585)・いと(6210)・
なし(5785)・こころ(4930)・おもふ(4567)・みる(4101)・もの(4091)

頻度の高い、いわゆる基本語彙は予想通り和語ばかりだが（注7）、中でも本論文で注目している「ある（有）」は一際群を抜いたトップの座を占めている。

しかしこればかりではないのだ。11位以下でも頻度の高い語に明らかに「ある」を含んだものがある。例えば16位の「なる（成・為）」（2113）、22位の「さり（然有）」（1707）、55位の「かかり（斯有）」（934）、68位の「ありさま（有様）」（824）などが見つかる。言うまでもなく「なる」は「にある」の詰まったものだし、続く2つもそれぞれ「さ・あり」「かく・あり」である。これら4語を加算すると、一位の「ある」は(9034)からさらに(14612)とはね上がり、第二位の「こと」のおよそ二倍の数となってしまう。ましてや-ARUを含んだ自動詞は数多くあるから、如何に「ある」が語彙の面から日本語を底辺で支えているかが理解されよう。

単語としての語彙のみならず、「ある」は文法ツールとして極めて重要な形態素でもある。「自動詞」の語幹や「受け身・尊敬・可能・自発」の助動詞であることは見た。自動詞の語幹（例えば「止まる・始まる・かかる・決まる」の-ARU）を(6-1)とし、「受け身・尊敬・可能・自発」の助動詞（例えば「食べられる・飲まれる」の古い形「食べらる・飲まる」の-(R)ARU）を(6-2)として、これに続けて以下に箇条書きすることでその語彙の驚くべき多様性と広がり指摘してみよう。思いつくだけでも(6-3)から(6-10)まで列挙が可能である。ここに述べるのは主なもので、これが全てでは決してない。

6-3 「ある」は名詞文を作る

現代日本語の三基本文の一つである名詞文だが、これを作る「だ」も「ある」が支えている。「だ」は「にてある」⇒「である」⇒「である」と転じて来ているからである。さればこそ名詞文の否定形で「元気ではありません」と「ある」が出てくるのだ。また、戦争中にはこの起源そのままの「山田二等兵であります」などという文が多用された。書き言葉では「コソボの難民問題は深刻である」の「である」が依然健在であることは言うまでもない。しかし「深刻である」とは「深刻という状態において、（そこに）ある」というのが原意なのだから、日本語の名詞文は起源的には「存在文」なのである。

名詞文としては「元気だ」に先行して「元気なり」があったが、こちらは「元気に・あり」の詰まった形で、やはり「ある」が土台になっている。名詞文において名詞に続く格助詞が「に」から「で」に変化したことは、「この家の主でございます」と言うところを時代が遡れば「この家の主にございます」と言っていたことと並行している。日本語において主体を示す筈の格助詞が、名詞文においては、本来場所を示す「に」と「で」が前後して使われてきたのは極めて興味深い事実だ。出来事の場所を示す「（大きな地震が）神戸であった」と同定文の「（着いた港は）神戸であった」が同じ文になってしまうのはそのせいである。（注8）

名詞文には「だ」「です」「である」と並んで「でしょう」「だろう」⁷³などもあり、これらが全て「ある」起源であるのは言うまでもない。

6-4 過去の助動詞の「た」

「来た」「冷たかった」「雨だった」などと過去形に現れる「た」は起源的にはむしろ「完了」だが、これまた同様に「ある」起源だ。「討ち取った！」は「討ち取ったり！」の「り」が落ちたものであって、さらに遡れば元の形は「討ち取ってあり」である。これまた「討ち取った」という状態において（そこに）ある」の存在文である。英語の場合の完了文、例えばI have read a book.は起源的にI have a book, read.と「所有文」（「読んだという状態で本を持つ」）なのと対照的である。

上記(6-3)の様に名詞文の「だ」そのものが「にてある」起源なのだから、これを過去形にした「だった」には「ある」が二回も重ねて隠れていることになる。例えば「雨だった」という文は「雨にてあり+てあり」という構造で、それが前後とも変わり「雨であり+てあり」から「雨だ・った」と変わってきたものである。

6-5 形容詞文

次に挙げる基本文は形容詞文である。その丁寧形否定文は「ある」がないと作れない。例えば「美しいです」という文がある。これを否定文にするには「美しくないです」と「美しくありません」の二通りあるが、いづれにしても「ある」を使っている。後者の「ありません」には「ある」がそのまま見えるが、前者の「です」も前に述べた様に本来は「であります」だからだ。

形容詞にもとあった「かり活用」は「く・あり」で、「高かる山」とは「高く（＝高いという状態で）＋（そこに）ある」という存在文から出来ている。「安かろうが高かろうが、買います」などと今でも使われるものだ。

6-6 「な」形容詞

学校文法で言うところの「形容動詞」、日本語文法ではよく「な形容詞」と言われものも起源は「ある」だ。「元気な田中さん」はその前の形は「元気なる田中さん」であって「なる」は名詞文の所(6-3)で述べた様に「にある」が原形である。これまた「元気に（＝元気という状態で）ある」のだから、もともとの発想は存在文である。

6-7 「んです」文

日本語の実に多くの文が「んです」で終わる。文脈によっては「のです・のだ・のであります」などにもなる。例えば次の二つの文の違いは何だろうか。

(13) 先生が名古屋へ旅行しています。

、14) 先生が名古屋へ旅行しているんです。

(13)では単に先生の行為を事実として述べているにすぎないが、(14)ではそれに重要なモーダル要素が加わる。このモーダル表現の機能を解く鍵は(14)の「ん」（あるいは「の」）がその前の文をひっくるめて一個の名詞に変えてしまう点にある。構文的には(14)はもはや「Nです」と変わらない。かくして(13)の動詞文は、モーダル処理を経た(14)では名詞文となる。

さてここで名詞文は上の6-3で見た様に「ある」に立脚した存在文であることを思い出そう。「んです」文は何よりも「その事は、人間のコントロールを超えて、もうそこに既成事実として存在、成立している」と呈示する手段なのだ。「旅行しているんです」は、後半の「んです」を「のであります」まで遡れば、その起源が存在文にあることがさらによく理解出来るだろう。（注9）

6-8 条件表現の「たら・なら」

さらに条件表現にも「ある」が登場する。「なら」と「たら」である。「飲んだら乗るな。乗るなら飲むな」というのは語呂のよい交通安全の標語だが、「飲んだら」は「飲みてあらば」から、「乗るなら」は「乗るにあらば」からで、最後の「あらば」に「ある」が見えている。この形から双方「ば」が落ちたものである。

6-9 不定冠詞としての「ある」

日本語には英仏語のような冠詞は定冠詞、不定冠詞ともないとされるが、もし最もこれに近いものを同定するとすれば、それは不定冠詞としての「ある」だろう。言うまでもなく、「ある男」とは存在文の「男（が）ある」の連体形を使ったもので、意味は「そこにある男」である。「昔、男ありけり」のように「いる・ある」の区別は今ほどはっきりしていなかった。

(15)-e A man was living in that village.

(15)-j ある男がその村に住んでいた。

6-10 「ある」起源の接続詞

接続詞にも「ある」は貢献している。「だから・だが・されど・だけど」などはそれぞれ「であるから・であるが・さあれども・であるけれども」から来ているからだ。

6-11 いくつかの日常表現

如何に「ある」が日本語の屋台骨を支えているか、その発見の旅の最後のとどめとして日常生活の基本表現「ありがとう」と「さようなら」を挙げよう。日本語の最初のクラスから「ある」は出てくるのだ。言うまでもなく「有難う」は漢字で書く通り「そうである」「そこにある」

ことが難しい事態の出現に感謝する訳だ。「たく」が「とう」に変わるのは「おめでたく」の「おめでとう」、「お早く」の「お早う」などと全く並行した、特に関西地方の言い方である。殿様の台詞で「苦しゅうない。近う」と言うのは「苦しくない。近く」からの全く同じ音便変化である。(注10)

「さようなら」の方は上記(6-8)で見た条件表現「ならば」を含む「その様ならば」であり「にあらば」の詰まったものである。意味的にも我々のよく使う別れの際の表現「それでは」「それじゃ」「じゃ」、侍言葉の「しからば」「さらば」などまでに一貫した淡泊であっけない日本的表現だ。英語のGod be with ye.から来たGood-by、スペイン語のAdiosの様に神様を持ち出すでもなく、かと言って仏語のAu revoir、北京語の「再見」、ドイツ語のAuf Wieder-sehen/-schauenやらイタリア語のArrideverti.の様に再会を期するのでもない。お隣りの朝鮮語の様に去りゆく相手に「アンニョンヒー・カセヨ」と「アンニョン (= 安寧)」を祈るでもないのだ。(注11)

さて、こうして見てくると、日本語を代表する単語を一つだけ挙げるなら迷わずに「ある」を選ぶべきだろう。池上(1977)は日本語を「なる言語」と言ったが、「なる」自体が「にある」からの派生語であることを考えると、もう一つ踏み込んでむしろ日本語は「ある言語」と言った方がより適切だ。

7. 英語は典型的な「する」言語

日本語に「ある」が、あるいはそのまま、あるいは姿を変えて大活躍するのとちょうど並行するかの様に、英語にもまた「出ずっぱり」の活躍を見せる動詞がある。それは日本語の「ある」に通じる動詞BEではなく、DOつまり「する」である。

上記の使役表現に関する日英語比較の表で、日本語では「する」が、仏語ではFAIREが使われているのを見た。ところが英語ではここで当然予想されてよいDOが現れない。その理由は、DOが重要でないのではなくて、むしろ既に助動詞として他の様々な機能を帯びてしまっていて「使役まで手が回らない」のが実情であるからである。この英語動詞DOの重要性は同じインドヨーロッパ語族かつゲルマン語派のドイツ語と較べるとさらに顕著となる。日本語の「ある」探訪と同じ様に箇条書きで述べてみよう。なお、ここではBE動詞、HABE動詞以外の一般動詞のみを取り上げる。

日本語の「ある」と較べて列挙する項目の数は半分以下だが、(7-1)から(7-4)に挙げる4点は構文的見地から基本的なものであることに注目したい。

7-1 疑問文

ドイツ語では主語と動詞の位置を逆にするだけで疑問文が得られるが、

76 英語の方にはDOが要る。

(16)-g Essen Sie rohen Fisch ?

(16)-e DO you eat raw fish?

7-2 否定文

ドイツ語では動詞に否定詞のnichtを付けるだけだが、英語はnotのみではならず、又してもDOを持って来る。(注12)

(17)-g Er kannte nicht ihren Namen.

(17)-e He DID not know her name.

7-3 他の一般動詞の代表

さらに(名詞では代名詞にあたる)代動詞(pro-verb)としてのDO。ドイツにはそれに当たるものはなく、単に同じ動詞を繰り返すだけだ。

(18)-g (Wer sah Peter?) ⇒ Maria sah ihm.

(18)-e (Who saw Peter?) ⇒ Mary DID.

7-4 強調文

最後に強調文がある。ドイツ語では「本当に」と言うような副詞(natürlich, sicher, gewiss etc)を使って主語と動詞を倒置するか、あるいは普通の文のまま動詞上に強調イントネーションに置くしかない。英語ではここでもDOが使われる。

(19)-g Natürlich glaube ich das.

(19)-g' Ich GLAUBE das.

(19)-e I DO believe it.

これらの例から英語における動詞DOの機能重複はまさに驚くべきものと言わねばならないことが理解されよう。角田(1991)などはこのDOの八面六臂の活躍ぶりをもって「万能助動詞は他の言語に見当たらない、珍しいものである」とも「英語はこれらの点で実に特殊な言語である。決して、人間言語の中で代表的な、標準的な言語ではない」とも述べている。タイポロジー(言語類型論)の分野の専門家でも世界の130にも及ぶ言語を比較検討した上でのこの言葉には強い説得力がある。

池上の英語を「する言語」日本語を「なる言語」をみなす立場は「ある」とDOという二動詞の比較からも支持出来るものである。ただ前述の様に「なる」とは「ある」の変化した形であることから鑑みても、我々はむしろ「ある言語」という言い方をしたい。

これまでの英日両語の対照分析を踏まえて、言語文化的なアプローチを試みることも可能だろう。しかしそれはこの稿の枠を大きく越えるものである。(注13)

ただ英語と日本語は説得力のある対照的比較が出来やすいことは少なくとも言えるだろう。しかしこれはあくまでも共時的な比較をした場合である。時代を遡ればそう言った違いはばやけても来ようし、現代英語にアニミズム的な表現が未だに残っているのも事実だ（注14）。本稿執筆者は日本語は昔からの姿を色濃く留めているのに対して、英語の方は他の印欧語と較べてさえ急激に「ある言語」から「する言語」へと変貌を遂げたのだという通時的考察をしたことがある。（注15）しかし共時的な比較では、言語化されなければ全く同じ状況であるにも拘わらず、英語と日本語が極めて対照的、正反対の言語化を行うのも事実である。基本的に日本語は「存在文」を発想とするのに対して英語は「行為文」となる例である。そうした例を三つだけ挙げておきたい。

(20)-j 「時間がある」

(20)-e I have time.

(21)-j 「中国語が分かる」

(21)-e I understand Chinese.

(22)-j 「桜の木が見える」

(22)-e I see a cherry tree.

これらの例に明らかな様に、全く同じ状況下で日本語は自動詞を使い、あたかも「自然」にそこに状況が出来する如くに表現する。「人称代名詞」によるいわゆる「主語」の明示は日本語では文として不可欠ではないから、その結果として人間の行為性は強く打ち出されない。（注16）たとえ「私」を明示しても「が格」は既に「時間・中国語・桜の木」が占めてしまっている。残されたのは「に格」であり、「私」は「主体」ではなくむしろ「その状況が出来する場所」として言語化されるのである。明らかにこれらの文の主人公は「私」ではなく、無機物の「時間・中国語・桜の木」だ。(20)-jの「ある」にも(21)-j「分かる」にも「ある」が見えているのはむしろ当然なのである。これらの文は発想としては限りなく（場所と存在物を備えた）存在文に近いのだから。行為の対象となる「を格」は現れない。

英語では行為の主体である「私」が主語として立ち現れ、それは構文的に省略出来ない要素であり、「お金・中国語・桜の木」に向かって「所有する・理解する・見る」行為を主人公として意図をもって行うのである。それであるからこそ、これらの動詞は他動詞であり、moneyらは行為の対象となる直接目的語である。

言うまでもないことだが、上の3例は決して例外的ではない。「ほしい」を使う欲求、「要る」の必要、「好き・嫌い」表現、「出来る」の可能表現、「・・・したことがある」の経験文など基本的構文が悉く英語・日本語で対照的な差を見せるのである。

「普遍文法」の名のもとに、両語間に横たわるこれらの「世界観の対照的な違い」に国内国外の多くの研究者が目を伏せている傾向は残念だ。極端に言えば、主語も目的語もない、それでいてごく自然な発話の「好

「好きです」の代わりに「私はあなたが好きです」といった文を作って、それを持って<I love you.>と較べる様な傾向があるのだ。良くも悪くも言語の懐は深いから「私はお金を持っています」も「私はあなたを愛しています」などの文も、バタ臭いが「文法的」ではある。しかし、それらは自然な言語環境のもとで発する文ではないことを我々は語感として知っている。「日本語は述語のみで基本文として成立する」と認めるだけで省略も変形も要らないまま、「好きです」が<(I) love (you).>に当たることを三上章の「主語無用論」(1960)は40年近くも前に既に主張しているのだ。主語や目的語が基本文に不要であるなら、人称代名詞はその存在理由を失って、単なる人称詞となってしまうのである。「好きです」の意味がI love you.なのかYou love him.なのかWe love it.なのか、あるいはその他の意味なのかは、その場のコンテクストが決めればいいだけなのである。何も全てを言い尽すのが言語化ではない。大抵のヨーロッパ語が備えている男性女性名詞の違いや二人称代名詞の親しさによる区別を英語は失ってから久しいではないか。学校文法に英文法を下敷きにした主語を認めてから100年が過ぎた。「主語」は明治日本の近代化の高い「つけ」である。

日本語文法(とりわけ学校文法)が抜本的に改正され、真に日本語の発想に根ざした文法記述される日は来るだろうか。三上(1960)その為の重要な一里塚であったのだが、彼を越える文法家は現れるだろうか。(注17)望みはある。何故なら、この論文でその一端を見た様に、和語「ある」はいまだ途方もない程深く広く根を日本語に張り巡らしているからだ。日本語をかくも特徴づけるこの和語が、静かに、そして日本語の至る所に「ある」限り、我々日本語文法研究家の21世紀における使命は今後も明確に示され続けるであろう。

注

1. 例えば大野(1974a:1429-1430)が「れる・られる」の古形である「る・らる」についての詳しく記述している。大野がその語源として想定している「事態が生まれ出る」の意味の動詞「生(あ)る」は基本的に我々の考えに近いが、何も「生る」に限る必要はなく、「有る」も含んだ和語「ある」とすべきだろう。「ある」には「あるようになる」つまり「なる」や「うまれる」の意味も含んでいるからだ。因に「小諸なる古城のほitori」の「なる」は「にある」の意味をよく残している。時代劇でお馴染みの「お殿様おなありい！」もまた「出現」である。
2. チョムスキー(1965)のいわゆる標準理論が修正をせまられた理由の一つは、数量表現を含む文に「受動文の変形規則」が適用出来ない場合があることである。Many people speak a few languages. という能動文を変形規則にかけると受動文 A few languages are spoken by many people. が得られるが意味が大きく変わってしまう。
3. カナダ日本語教育振興会(CAJLE)1996年度春期日本語研究セミナー、モントリオール大学での発表「日本語と英仏語の受け身表現比較」(1996.4.20)
4. 最近エベレスト山頂近くでミイラ化した遺体が発見された英国の登山家マロリーの名言が想起される。1923年に「なぜ生命の危険を冒してまでエベレスト山に挑戦するのか」と聞かれて、彼は「そこに山があるから」。(Because the mountain is there)と答えた。mountain に定冠詞がついているのは勿論エベレスト山のことで、人間のコントロールを越えた「ある」の世界観が

- ここによく現れている。75年もの長きにわたって名言と語り継がれて来たのは、登山という人間の意志性を強く帯びたコンテクストの中でのこの文が意表をついたことによるものだろう。
5. もっとも一見-ARUが見えても、その前の部分が子音一つだけになってしまうような動詞(割る・刈る・去るなど)は自動詞とは限らない。これらは無論WAR-, KAR-, SAR-を語幹とすべきものである。
 6. 因みに漢語を使った「理解する」では他動詞となるが、この漢語を形成する「理」と「解」は二つとも「分ける」意味の漢字であることに注目したい。また、「理」の訓読みは「ことわり(=事+割り)」である。
 7. 基礎語彙の分布は大野晋(1974b)に詳しい。
 8. この事實は、多くの人称詞が「あなた・お前・手前・奥さん・殿・おたく」などの様に空間を現す言葉に発していることと明らかに関連している。日本語の世界を演劇に譬えれば「俳優」よりも「舞台」や「背景」に注目する傾向が強い。「俳優」に注目する英語をhomocentric 言語に較べて日本語はlococentric と言っているだろう。この点の考察をエッセーとして金谷(1998b)に書いたことがある。
 9. 「のである」文の機能に関する考察ではパシフィック大学の藤田直哉氏に教わる所が大きかった。
 10. 「有難う」をポルトガル語のObligado起源とするのは全く根拠のない民間語源説だ。感謝の気持を「そこに存在しがたい」という表現は諏訪地方に残る「おしょっさま」という方言にも現れている。この言葉は昔太平洋岸から延々と諏訪まで運ばれて来た貴重品の「塩」を「お塩様」と呼んだのがもとと言う。その塩が着く最終地点が「塩尻」である。
 11. あるいは相手を残して自分が去るなら「アンニョンヒー・ケーセヨ」(安寧にお留り下さい)となる。自分が行くか行かないかで別れの表現が変わる点でも朝鮮語は注目される。
 12. 名詞文と形容詞文という違いはあるが、日本語で「学生ではありません」「寒くありません」と「ある」で否定文を作るのと英語動詞文の否定のDOはまさしく対照的と言えるだろう。また、動詞文でも「昨日食べたじゃありませんか」などと「ある」を使った言い方がある。
 13. そうした試みの一端は金谷(1996)で発表した。
 14. 牧野(1994)はその意外性をついたとりわけ興味深い講演であった。
 15. Kanaya (1983)
 16. こうした日本語文法に組み込まれたアニミズム性についてはKanaya (1997),金谷(1998a)などで詳しく述べた。
 17. 久野(1973)や柴谷(1978)による三上の主語無用論に対する批判が無効であることはKanaya (1997)や金谷(1997)で示した。

参考文献

- 池上嘉彦(1977)「するとなるの言語学」月刊言語(1977.9-1978.8)
大修館書店
- 今西錦司(1980)「主体性の進化論」中公新書
- 大野晋(1974a)「岩波古語辞典」岩波書店
- 大野晋(1974b)「日本語をさかのぼる」岩波新書
- 大野晋(1993)「係り結びの研究」岩波書店
- 橋本進吉(1969)「助詞・助動詞の研究」(橋本博士著作集8)岩波書店
- 金谷武洋(1996)「日本語と日本人の自然観」カナダ日本語教育振興会
Newsletter(vol.12)

- 金谷武洋(1997)「学校文法60年の功罪」JOURNAL CAJLE(vol.1)
- 金谷武洋(1998a)「日本語主語再論：タイポロジーと印欧語古典文法への寄与」JOURNAL CAJLE(vol.2)
- 金谷武洋(1998b)「地名を巡って」月刊ふれいざー(1998年11月号)
- 北原保雄(1981)「日本語：文法2」「日本語の世界」中央公論社
- 久野 章(1973)「日本文法研究」大修館書店
- 柴谷方良(1978)「日本語の分析」大修館書店
- 鈴木孝夫(1975)「閉ざされた言語・日本語の世界」新潮選書
- 角田太作(1991)「世界の言語と日本語」くろしお出版
- 平川祐弘・鶴田欣也編(1994)「アニミズムを読む」新曜社
- 牧野成一(1978)「ことばと空間」東海大学出版会
- 牧野成一(1994)「日本語と英語はどう似ているか」カナダ日本語教育振興会講演(1994.12.4)
- 三上章(1960)「象は鼻が長い」くろしお出版
- 三上章(1975)「三上章論文集」くろしお出版
- 宮島達夫(1971)「古典対照語彙表」笠間書房(大野晋(1974:119)に引用)
- Comrie, B.(1981) *Language Universals and Linguistic Typology* , Oxford, Basil Blackwell
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax* , MIT Press
- Kanaya, T.(1983) *Sur la valeur fonctionnelle de la voix moyenne indo-européenne* , Master thesis, Université Laval
- Kanaya, T.(1997) *La notion du sujet en japonais* , Ph.D. dissertation , Université de Montréal
- Meillet, A. (1921) *Linguistique historique et linguistique générale* , Champion, Paris